

平成 28 年度

# 講 義 要 項

心理学研究科臨床心理学専攻

修 士 課 程

埼 玉 学 園 大 学

# 目 次

臨床心理学特論Ⅰ（小玉正博）	1
臨床心理学特論Ⅱ（佐々木美恵）	2
臨床心理面接特論Ⅰ（小山望）	3
臨床心理面接特論Ⅱ（小山望）	4
臨床心理査定演習Ⅰ（佐々木美恵）	5
臨床心理査定演習Ⅱ（佐々木美恵）	6
臨床心理基礎実習Ⅰ（小玉・小山・藤枝・羽鳥・佐々木）	7
臨床心理基礎実習Ⅱ（小玉・小山・藤枝・羽鳥・佐々木）	8
臨床心理実習（小玉・小山・藤枝・羽鳥・佐々木）	9
心理学統計法特論（小泉晋一）	10
データ解析法特論（小泉晋一）	11
臨床心理学研究法特論（木村登紀子）	12
教育心理学特論（尾形和男）	13
発達心理学特論（新井二郎）	14
発達臨床心理学特論（安藤智子）	15
人格心理学特論（平山栄治）	16
人間関係学特論（小山望・羽鳥健司）	17
心身医学特論（山本晴義）	18
精神医学特論（高橋正雄）	19
犯罪・非行心理学特論（角田亮）	20
臨床心理学特論（小玉正博・羽鳥健司）	21
心理療法特論（小玉正博・小山望・佐々木美恵）	22
老年福祉心理学特論（大川一郎）	23
障害者(児)心理学特論（太田俊己）	24
学校臨床心理学特論（勝倉孝治）	25
グループワーク特論（藤枝静暁）	26
コミュニケーション学特論（古澤照幸）	27
コミュニティ援助特論（金沢吉展）	28
臨床社会心理学特論（遠藤公久）	29
異文化間心理学特論（鈴木一代）	30
特別課題研究Ⅰ	
小玉正博	31
小山 望	32
古澤照幸	33
藤枝静暁	34
羽鳥健司	35
特別課題研究Ⅱ	
小玉正博	36
小山 望	37
古澤照幸	38
藤枝静暁	39
羽鳥健司	40

**授業概要**

心理的援助を展開する上で求められる臨床心理学的な考え方や知識、技術について理解し、臨床心理学専門家としての基本的態度を修得することを目的とする。具体的には、現代社会における臨床心理学の主要な課題やトピックスを取り上げながら、そこから浮かび上がる臨床心理学の問題意識や今日的課題の検討を通して、臨床心理士として期待される専門性と倫理、方法論を明らかにし、それらの習得を目指した講義をする。

**授業計画**

## 到達目標

1. 臨床心理学に対する時代的および社会的要請と臨床心理士の役割について理解する。
2. 臨床心理学的な援助の展開とその技法およびアセスメントについて具体的に説明できる。
3. 心理臨床の実践の独自性と隣接領域との連携のあり方について説明できる。
4. 臨床心理士の専門性と倫理について理解を深める。

第 1回	臨床心理学の歴史的展開と現状
第 2回	心理学的支援をめぐる社会的状況と課題
第 3回	心理臨床家としてのキャリア形成
第 4回	治療構造論（1）：治療契約、ケースマネジメント
第 5回	治療構造論（2）：ケースの見立て、事例の定式化
第 6回	治療関係の構築（1）：援助の過程
第 7回	治療関係の構築（2）：変化と抵抗
第 8回	臨床心理士に必要な資質と能力
第 9回	失敗事例から学ぶこと
第 10回	事例研究とスーパービジョンの意義
第 11回	心理臨床における職業倫理（1）守秘義務とインフォームドコンセント
第 12回	心理臨床における職業倫理（2）「すること」と「してはいけないこと」
第 13回	地域支援の考え方と課題
第 14回	隣接職種との連携と協働のあり方
第 15回	授業のまとめ

**履修上の注意**

授業ガイドanceで紹介する参考文献等を主体的に自学自習し、問題意識を深めること。講義に際しては積極的に発言し、教員との意見交換を行い、受講生同士の相互の理解に務めることが期待される。

**評価方法**

到達目標と関連して、授業中の質疑応答への参加度と理解度(40%)、提出されたレポートの完成度(60%)などを通じて総合的に評価する。

**テキスト**

講義内容に関連した参考文献を適宜紹介し、ハンドアウト資料を配付する。なお、倫理問題については、以下の文献が参考資料となる。「カウンセラー：専門家としての条件」誠信書房、「援助専門家のための倫理問題ワークブック」創元社

## 授業概要

心理援助の基本的考え方、構え、および基礎理論について、主に精神分析的、力動的オリエンテーションに基づいて講義する。授業の構成は、各回のテーマに沿った課題文献講読と授業内のディスカッションとなる。

## 授業計画

### 達成目標

1. 臨床心理士を志す者として、心理援助、心理面接についての各自の考えをもつ。
2. パーソナリティおよび内的世界について理解する視点をもつ。
3. 精神分析的、力動的オリエンテーションに基づく心理面接の基礎理論を習得する。

第1回	心理援助の基本的考え方
第2回	内的世界の基礎理論①：フロイト
第3回	内的世界の基礎理論②：クライン
第4回	内的世界の基礎理論③：ビオン
第5回	パーソナリティの基礎理論①：構造論
第6回	パーソナリティの基礎理論②：自己愛、スキゾイド等
第7回	セラピスト-クライエント関係の理解①：転移
第8回	セラピスト-クライエント関係の理解②：逆転移
第9回	心理面接の展開①：傾聴、共感
第10回	心理面接の展開②：抵抗、防衛、ワークスルー
第11回	心理面接の展開③：解釈、介入
第12回	心理面接の展開④：中断、終結
第13回	子どものセラピー①：子どもの内的世界
第14回	子どものセラピー②：セッティング、技法、親支援
第15回	スーパーヴィジョン、トレーニング

## 履修上の注意

各回の課題文献を全員が読んだ上で授業に臨み、積極的に議論に参加すること。

## 評価方法

授業参加態度（積極的発言、意欲、主体性）30%，担当発表（資料作成、プレゼンテーション、質疑応答）30%，筆記試験40%によって評価する。

## テキスト

とくになし。適宜文献を紹介する。

**授業概要**

心理療法における各理論的立場について学ぶ。具体的には、クライエント中心療法、精神分析的療法、対象関係論、分析的心理療法、遊戯療法、行動療法、認知行動療法、ゲシュタルト療法、交流分析、集団療法、自律訓練法などの諸理論について十分習得し、心理的援助を求めている人への症状や問題に対する各アプローチの相違点、類似点について理解する。受講者は各療法についての事前研究により担当部分のレポート発表および討論を行い、療法間の関連性についてより洞察を深める。さらにこれらの討論を踏まえて、各療法を俯瞰する統合モデルに触れながら、どのような対象に対して、どのようなアプローチが有効かについて、各技法の意義と限界を十分理解できるように講義を行う。

**授業計画****到達目標**

1. 心理臨床を支える主要な理論の人間観を理解し、その相違点と類似点について説明できる。
2. 各理論による具体事例の学習を通してそれぞれの治療的かかわりの実際について理解する。
3. 現代心理療法の潮流としての心理療法の統合モデルについて説明できる。

第 1 回	心理療法各論における比較の視点（相違点・類似点）
第 2 回	クライエント中心療法理論 C.R.ロジャーズ
第 3 回	精神分析および分析心理学 S.フロイトと C.G.ユング
第 4 回	対象関係論 M.クライン、 D.W.ウィニコット
第 5 回	実存主義 V.フランクル
第 6 回	遊戯療法 V.M.アクスライン
第 7 回	行動療法 H.J.アイゼンクと J.ウォルビ
第 8 回	認知療法 A.T.ベック
第 9 回	ゲシュタルト療法 F.S.パールズ
第 10 回	交流分析 E.バーン
第 11 回	家族療法 G.ベイトソン
第 12 回	集団療法 J.L.モレノ
第 13 回	自律訓練法 J.H.シュルツ
第 14 回	森田療法 森田正馬
第 15 回	現代心理療法の統合モデル

**履修上の注意**

1. 授業では、受講者が学習課題として指定される各心理療法の概要についてレポート発表を行い、それに基づいて討論を行うので、担当箇所については十分な事前学習を行い、資料を準備すること。
2. 講義は事前学習とレポート発表を受けて、討論を中心に進められるので、主体的に参加すること。

**評価方法**

到達目標に照らして、質疑討論における理解度(40%)、提出された課題レポートの完成度(60%)などから総合的に評価する。

**テキスト**

必要に応じ適宜参考資料を配布する。また、講義に関する参考文献として、「現代のエスプリ別冊 貢献者の肖像と寄与」(至文堂)、「心理療法の諸システム」(金子書房)を挙げる。特に、後者は欧米において最先端の心理療法の統合モデルを扱っており、アプローチ全体を俯瞰する上で参考になる。

**授業概要**

心理面接の基本原則(場面構造化、面接時間、面接室、面接時の契約、面接のプロセス、面接記録、面接の終結など)について十分な理解を深め、実際にそれを実施できることを目標とする。また臨床心理面接特論Ⅰを踏まえ、各治療理論に基づく実際の心理的援助技法を修得する。具体的にはクライエント中心療法、行動論的アプローチ(行動療法、応用行動分析)、集団療法(グループカウンセリング、ロールプレイ、ソシオドラマ)、弛緩訓練法などの諸技法を取り上げて、これらの技法を模擬事例および模擬面接を実際に体験しながら技法の習得を目標とした講義を行う。

**授業計画****到達目標**

1. 心理面接の基本条件(構造、機能、面接過程)について説明できる。
2. 各理論的立場の実際の心理的援助技法を学び、適切にそれを説明できる。
3. 体験学習を通して各種の技法を習得し、それを用いることができる。

第 1回	心理面接の構造と機能
第 2回	面接の目的と方法：初回面接、治療契約、心理アセスメント、生育歴、行動観察
第 3回	面接のプロセス：面接記録の取り方、中断と終結、他機関へ紹介、効果測定
第 4回	来談者中心療法の展開(1)ロジャーズ理論に基づく面接過程の解説
第 5回	来談者中心療法の展開(2)傾聴・共感・受容・支持・質問・明確化、繰り返し
第 6回	来談者中心療法の展開(3)模擬面接ワーク
第 7回	行動論的アプローチ(1)行動査定とその手続き、面接プロセス
第 8回	行動論的アプローチ(2)系統的脱感作法、シェーピング法、自己モニタリング法
第 9回	弛緩訓練技法：自律訓練法、漸進的筋弛緩法、ワークアウト
第 10回	個人心理面接と集団心理面接の異同とその意味
第 11回	集団心理面接(1)グループカウンセリング
第 12回	集団心理面接(2)アクション・メソッド
第 13回	ロールプレイ体験(1)：一対一場面
第 14回	ソシオドラマ体験(2)：集団場面
第 15回	まとめ

**履修上の注意**

本講義では心理療法の各手法についてワークを通じて学ぶことを目的としている。そのため、受講生は積極的に討論に参加すること、体験活動に加わることが求められる。また、配布される資料やテキストによって事前学習と事後学習を行うこと。

**評価方法**

到達目標に照らして、各援助技法の理解度と習熟度(40%)、および課題レポートの完成度(60%)によって評価する

**テキスト**

配布資料のほか、授業内で適宜参考書を紹介する。

**授業概要**

知能検査を中心として、発達あるいは知的水準及びその特性について査定する方法を学ぶ。とくに、現在使用されている有効な知能検査法として田中ビネー知能検査VとWISC-IVを中心に取り上げ、その実施法、分析法、解釈法、心理検査報告書作成までの一連のプロセスについて、実践的に指導する。検査対象者への援助指針を提供し得る適切な心理検査報告書が作成できるよう、個別指導を有効に組みながら指導する。

**授業計画**

## 達成目標

1. 知能検査の歴史的展開と今日的課題について学び、その利用の意義を理解する。
2. 田中ビネー知能検査V及びWISC-IVの実施法、分析法、解釈法を学ぶ。
3. 有用な心理検査報告書の書き方を習得する。
4. 知能検査結果と援助実践の有効なリンクについて習得する。

第 1 回	知能検査による心理査定の意義とその限界
第 2 回	田中ビネー知能検査V①：理論と実施法
第 3 回	田中ビネー知能検査V②：結果の分析と解釈
第 4 回	田中ビネー知能検査V③：履修生同士によるテスティ一体験
第 5 回	田中ビネー知能検査V④：心理検査報告書作成/個別指導 I
第 6 回	田中ビネー知能検査V⑤：心理検査報告書作成/個別指導 II
第 7 回	田中ビネー知能検査V⑥：検査結果報告における留意点
第 8 回	WISC-IV①：理論と実施法
第 9 回	WISC-IV②：結果の分析と解釈
第 10 回	WISC-IV③：履修生同士によるテスティ一体験
第 11 回	WISC-IV④：心理検査報告書作成/個別指導 I
第 12 回	WISC-IV⑤：心理検査報告書作成/個別指導 II
第 13 回	WISC-IV⑥：心理検査報告書作成/個別指導 III
第 14 回	WISC-IV⑦：検査結果報告における留意点
第 15 回	知能検査におけるテスト・バッテリーの考え方と留意点

**履修上の注意**

あくまでも授業内学習であることに十分配慮し、実質的な知能検査とはならないような工夫をもって指導するが、自らの知能査定に近い体験を伴うことを予め了解の上、授業に臨んでもらいたい。

**評価方法**

心理検査報告書の完成度 50%，授業参加態度（積極的発言、意欲、主体性）50%によって評価する。

**テキスト**

必要な文献を適宜紹介するとともに、関連資料を配布する。

**授業概要**

投影法パーソナリティ検査であるロールシャッハ・テストの理論および実施法、分析法、解釈法を学ぶ。受講生同士がテスターあるいはテストィーとなって、実際に演習によりロールシャッハ・テストとバウム・テストを実施する。その後個別指導を中心として、自らのテストィ一体験データについて、心理検査報告書を作成する。それらすべてのプロセスを通して、ロールシャッハ・テストとバウム・テストのテスト・バッテリーによる心理査定を実践的に学ぶ。

**授業計画**

## 達成目標

1. ロールシャッハ・テストの実施法、分析法、解釈法を学ぶ。
2. バウム・テストとのテスト・バッテリーによるパーソナリティ検査の一連の流れを習得する。
3. 有用な心理検査報告書の書き方を習得する。
4. パーソナリティを査定する上での基本的な倫理を体得する。

第 1 回	ロールシャッハ・テストによる心理査定の意義とその限界
第 2 回	実施、分析、解釈①：施行法
第 3 回	実施、分析、解釈②：分類の前提、反応領域の分類
第 4 回	実施、分析、解釈③：反応領域の分類
第 5 回	実施、分析、解釈④：反応決定因の分類
第 6 回	実施、分析、解釈⑤：反応決定因の分類、反応内容の分類、形態水準の評価
第 7 回	バウム・テストとのテスト・バッテリーによる実施法
第 8 回	分析、解釈の視点①：解釈の前提、意味づけ
第 9 回	分析、解釈の視点②：一般的記号の総合的解釈、継列分析
第 10 回	心理検査報告書作成/個別指導①：スコアリング確認と報告書案作成
第 11 回	心理検査報告書作成/個別指導②： 知的側面、情緒的側面、対人的側面、現実吟味力等各視点からの記載
第 12 回	心理検査報告書作成/個別指導③：力動的視点、継列分析からの記載
第 13 回	心理検査報告書作成/個別指導④：パーソナリティの全体評価とその記載
第 14 回	心理検査報告書作成/個別指導⑤：心理検査報告書の仕上げ
第 15 回	心理検査報告書作成/個別指導⑥：結果フィードバックとその留意点

**履修上の注意**

あくまでも授業内学習であることに十分配慮した上で指導するが、自らのパーソナリティ査定体験を伴うことを予め了解の上、授業に臨んでもらいたい。

**評価方法**

心理検査報告書の完成度 50%，授業参加態度（積極的発言、意欲、主体性）50%によって評価する。

**テキスト**

「改訂 新・心理診断法 ロールシャッハ・テストの解説と研究」（金子書房）  
 「ロールシャッハ・テストの学習 片口法スコアリング入門」（金子書房）  
 その他、適宜テキストを紹介する。

**授業概要**

体験学習を通して臨床心理学的援助を効果的に行うためのかかわり技術を身につけることを目的とする。そのためにロールプレイでの学習を中心にして、コミュニケーションスキル、ヘルピングスキル、プレイセラピー等の諸技法を用いた対応の仕方について実践的な指導を行う。なお、課外実習として、心理的サービス活動の実際に触れるために、臨床心理士のいる各施設見学も平行して行われる。

**授業計画****到達目標**

1. 対人援助職に求められるかかわり技術について理解する。
2. 援助者役割と被援助者役割を相互体験することにより、援助機能とその意味を理解できる。
3. コミュニケーションスキル、ヘルピングスキルを対話場面で効果的に使うことができる。
4. 課外実習として、臨床心理士のいる各施設を訪問して心理的サービス活動の実際に触れる。

※授業は1回あたり2コマ連続で行う。

第1回	基礎実習Ⅰの目的およびその意義 :
第2回	マイクロカウンセリングの技法：その理論概説
第3回	マイクロ技法の実際：質問技法
第4回	マイクロ技法の実際：言いかえ技法
第5回	マイクロ技法の実際：要約技法
第6回	マイクロ技法の実際：反映技法
第7回	マイクロ技法の実際：焦点づけ技法
第8回	マイクロカウンセリングのまとめと評価
第9回	模擬面接の進め方：場面構成と演者の役割について
第10回	ミニカウンセリング実習：不安を中心に
第11回	ミニカウンセリング実習：怒りを中心に
第12回	ミニカウンセリング実習：喪失と悲嘆を中心に
第13回	ミニカウンセリング実習：友人関係を中心に
第14回	ミニカウンセリング実習：家族関係を中心に
第15回	授業のまとめ

**履修上の注意**

1. ロールプレイは基本的にトライアド形式で行うので、自己都合による欠席は認められない。諸般の事情により出席困難な場合は、事前に申し出て承諾を得ること。
2. 実習が円滑に実施できるように、受講者の相互尊重と相互理解、相互協力が求められる。
3. 課外実習として学外の教育、福祉、医療関連の諸施設を訪問して、心理的サービス活動の実際に触れ、対人援助のあり方について理解を深めることが求められる。施設訪問に際しては、社会人としての礼節をもって行動すること。

**評価方法**

かかわり技術の習熟レベルが到達目標の基準に到達しているかを評価するために面接技術試験を行う。もし、評価基準に満たない場合は再試験を行う。

**テキスト**

授業内容に関連した参考文献を適宜紹介するとともにハンドアウト資料を配付するが、事前学習と事後学習のために以下の文献を紹介する。

- 「マイクロカウンセリング技法」(風間書房)
- 「健康心理カウンセリング」(実務教育出版)

**授業概要**

基礎実習Ⅰに引き続き、相談場面で相談者との間によりよい関係性を築き、支援できるためのかかわり技術を身につけ、より実践的な面接技法と面接過程について学習する。具体的には、受理面接から事例の見立て、治療方針の決定に至る一連の事例定式化のプロセスを学習し、実際にそれを実践できるように指導する。なお、課外実習として、心理的サービス活動の実際に触れるために、臨床心理士のいる各施設見学も平行して行われる。

**授業計画****到達目標**

1. 心理的相談活動の内容と流れを理解し、事例定式化を展開できる能力を身につける。
2. 相談研修員として臨床心理カウンセリング・センターの運営に役割を果たす。
3. 相談研修員としての態度と行動規範を理解して、遵守することができる。
4. 課外実習として、臨床心理士のいる各施設を訪問して心理的サービス活動の実際に触れる。

※1回あたり2コマ連続で行う。

第1回	基礎実習Ⅱにおける目的と学習方針
第2回	相談受付の課題：受理と照会
第3回	インテーク面接の進め方とその留意点(1)：導入とその展開
第4回	インテーク面接の進め方とその留意点(2)：記録の取り方と面接の終了
第5回	インテーク会議の開催と運営について
第6回	教員による事例の発表と検討(1)：認知行動論的アプローチから
第7回	教員による事例の発表と検討(2)：力動論的アプローチから
第8回	教員による事例の発表と検討(3)：関係論的アプローチから
第9回	教員による事例の発表と検討(4)：グループ・アプローチから
第10回	教員による事例の発表と検討(5)：心理教育的アプローチ
第11回	スーパービジョンの考え方：その理論モデル
第12回	スーパービジョンの進め方：指導の視点と留意点
第13回	課題発表(1)：相談研修員の役割
第14回	課題発表(2)：相談研修員の成長課題
第15回	課題発表(3)：他領域専門家との連携

**履修上の注意**

1. 自己都合による欠席は認められない。諸般の事情により予め出席困難が明確な場合は、事前に申し出て承諾を得ること。
2. 実習は個人単位だけでなく、協働で行う課題もあるので、受講者同士の配慮と協力が求められる。
3. 課外実習として学外の教育、福祉、医療関連の諸施設を訪問して心理的サービス活動の実際に触れ、対人援助のあり方について理解を深める。施設訪問に際しては、社会人としての礼節をもって行動すること。

**評価方法**

到達目標と関連して、質疑応答、発言等による授業参加度(20%)、課題発表への取り組み状況と発表内容(30%)、レポート課題の完成度(50%)などから総合的に評価する。

**テキスト**

内容に関連した参考文献や映像資料を適宜紹介するとともに、ハンドアウト資料を配付する。

**授業概要**

本学の臨床心理カウンセリング・センターでの実習を通して、心理臨床における実践力を身につけることを目的とする。学内実習においては、相談研修生として心理カウンセリング・センター運営に参加し、受付業務や業務管理を行う。さらに、定例の事例会議への参加、受理面接および相談事例の陪席や観察、相談事例の担当、担当事例について個別および集団によるスーパービジョンなどを受ける。また、学外実習においては、協力施設等において相談面接の陪席、心理査定、事例研究会への参加、その他の心理臨床活動を行えるよう指導する。

**授業計画****到達目標**

1. 相談研修員として相談活動の内容と実習の流れを理解し、心理カウンセリング・センターの運営に十分な役割を果たす。
2. 相談研修員としての行動規範を遵守し、主体的に相談業務に携わることができる。
3. 学外実習を通して心理臨床の実際に触れ、心理的支援者としての態度とスキルを養う。

※1回あたり2コマ連続で行う。

回数	春期	秋期
第 1回	臨床心理実習の意義	心理的支援者としての実習課題の確認
第 2回	相談指導教員の役割とセンター運営の意味	学外実習：学校領域における活動報告
第 3回	学内実習：相談研修員の役割と義務	学外実習：福祉領域における活動報告
第 4回	学内実習：受理会議の進め方	学外実習：医療領域における活動報告
第 5回	学内実習：事例報告および事例研究	中間報告①：学外実習における課題とその対応
第 6回	事例会議：中断事例と終結の扱い方	学外実習：学校領域における活動報告
第 7回	学外実習にむけての事前学習	学外実習：福祉領域における活動報告
第 8回	学外実習：学校領域における活動報告	学外実習：医療領域における活動報告
第 9回	学外実習：福祉領域における活動報告	中間報告②：学外実習における課題とその対応
第 10回	学外実習：医療領域における活動報告	学外実習：学校領域における活動報告
第 11回	学外実習における課題とその対応：中間報告	学外実習：福祉領域における活動報告
第 12回	学外実習：学校領域における活動報告	学外実習：医療領域における活動報告
第 13回	学外実習：福祉領域における活動報告	事例会議：実習生の役割と事例との関わり
第 14回	学外実習：医療領域における活動報告	事例会議：臨床心理士と関連専門家との連携
第 15回	学外実習の事後指導とまとめ	実習全体のまとめ

**履修上の注意**

1. 自己都合による欠席は認められない。諸般の事情により出席困難な場合は、事前に申し出て承諾を得ること。
2. 実習が円滑に実施できるように、研修員の相互理解、相互協力が求められる。
3. 学外実習にあたっては、社会人としての礼節をもって施設訪問を行うこと。また、実習施設および担当指導者に敬意を払い、指導方針を遵守すること。
4. 相談研修に関する個別のポートフォリオを作成し、研修レポートの記録内容に基づき指導が進められる。

**評価方法**

到達目標と照らし、相談研修生としての学内および学外実習への取り組み状況(40%)、受理会議およびケース会議への参加と発表(30%)、研修レポートの適切性(30%)などによって総合的に評価する。

**テキスト**

特に指定しない。実習過程において適宜資料等を配布する。

**授業概要**

実証的な心理学研究を行う上で使用される統計の知識や分析法を学び、実際にコンピューターを操作し、統計のソフトウェアを使って分析できる能力が必要である。そのため、本講義では、心理統計法の理論背景を学び、より実践的で有益な心理統計手法を選択・実施できるようになることを目的としている。心理統計の手法を理解した上で、実際に Excel および SPSS などの統計ソフトウェアを操作し、心理学的統計処理を行えるように講義をする。

**授業計画****到達目標**

1. 各心理統計に関する理論背景（統計的有意性、検定の原理、標本分布）と方法を理解する。
2. 適切な分析方法 ( $\chi^2$  検定、 $t$  検定、 $F$  検定、相関分析など) を選択することができる。
3. Excel ソフトを用いて統計処理を行うことができる。
4. 統計ソフト SPSS を用いて統計処理を行うことができる。

第 1 回	臨床心理学における統計法の学習目的と方向性
第 2 回	心理統計法の主な理論
第 3 回	記述統計値算出のねらい
第 4 回	名義変数の分析：カイ二乗検定の理論と実践
第 5 回	変数間の関連を知る：相関分析の理論と実践
第 6 回	相関分析の応用
第 7 回	分析手法と操作のまとめ（確認テスト）
第 8 回	平均値の比較： $t$ 検定の理論と実践
第 9 回	分析手法と操作のまとめ（確認テスト）
第 10 回	1 要因分散分析理論とその実際的活用
第 11 回	2 要因分散分析理論とその実際的活用
第 12 回	交互作用の理解
第 13 回	多重比較・表作成の方法とその理解
第 14 回	統計分析法の選択判断
第 15 回	分析手法と操作に関する全体的整理とまとめ

**履修上の注意**

各回の授業で扱う内容について、教科書・参考書の対応する箇所を事前学習しておくことが望ましい。なお、授業内容を復習し、自主的に統計手法の習熟に努めること。

**評価方法**

期待される諸能力（知識、技能）が到達目標に至っているかについて、確認テスト（50%）および最終テスト（50%）によって総合的に評価する。

**テキスト**

「SPSS と Amos による心理・調査データ解析：因子分析・共分散構造分析まで」（東京図書）  
「よくわかる心理統計」（ミネルヴァ書房）

## 授業概要

実証的な心理学研究を行う上では、よく使用される統計の分析法を学ぶだけでなく、高度なデータ解析法を習得する必要がある。本講義では、実際に統計ソフトウェアを操作し、心理統計法を用いたデータ解析を行えるようになることを目的とする。また、簡易な統計分析手法に留まらずSPSSやAMOSなどの高度な統計ソフトウェアを用いてより複雑なデータ解析ができるように講義する。

## 授業計画

### 到達目標

1. 多変量解析法に関する統計理論を理解する。
2. 多変量データに関する適切な分析手法の選択能力を習得する。
3. 統計ソフト SPSS を用いた多変量解析ができる。
4. 統計ソフト Amos を用いた多変量データの処理ができる。

第 1 回	臨床心理学における定量的なデータ解析の意味
第 2 回	主な多変量解析法の種類とその目的
第 3 回	因子分析法の理論と実際
第 4 回	因子分析の回転方法
第 5 回	信頼性と妥当性の検討
第 6 回	操作のまとめと確認テスト
第 7 回	単回帰と重回帰分析
第 8 回	重回帰分析
第 9 回	重回帰分析の応用および図表作成方法
第 10 回	操作のまとめと確認テスト
第 11 回	Amos の操作方法
第 12 回	観測変数を用いたパス解析
第 13 回	共分散構造分析の基本
第 14 回	共分散構造分析の実際と応用
第 15 回	操作のまとめと確認テスト

## 履修上の注意

各回の授業で扱う内容について、教科書・参考書の対応する箇所を読んでくることが望ましい。  
なお、授業で出された課題を復習し、統計手法の習熟に努めること。

## 評価方法

期待される諸能力（知識、技能）が到達目標に至っているかについて、確認テスト(50%)および最終テスト(50%)によって総合的に評価する。

## テキスト

「SPSS と Amos による心理・調査データ解析：因子分析・共分散構造分析まで」（東京図書）  
「よくわかる心理統計」（ミネルヴァ書房）

**授業概要**

臨床心理学研究は、現在、その理念も研究方法も多様であり、それぞれが独自な特徴をもちながら研究領域全体の一部を担っているが、未だ多くの課題を抱えている。本講義では、臨床心理学の理念と研究方法について、その多様性と可能性を検討し、研究の一般的プロセス、現在の具体的対象領域と、方法としての実験法・観察法・調査法・検査法・面接法などについて習得することをめざす。次に、研究テーマによる量的方法ないしは質的方法の識別・選択と研究デザイン・展開方法を相互に吟味・検討し、さらに、事例研究の具体的方法あるいは実践活動の評価（効果）研究の方法などについて理解を深めることによって、できるだけ各自の修士論文作成とその後の専門職として要請される課題に対する研究的取り組みに資することを目指した講義をする。

**授業計画****到達目標**

1. 臨床心理学における研究の視点と目的、方法の多様性を知り、研究者の個別性・独自性の重要さを理解する。
2. 実践の場における研究の必然性と必要性を理解し、臨床的研究デザイン（目的の立て方、方法の選択、検証の仕方）を策定することができる。
3. 臨床心理学の研究目的と方法に照らして量的研究法と質的研究法の特徴を十分に理解し、適切に利用することができる。
4. 「心理臨床の実践」と「実践しながらの臨床心理的研究」の関連性と意義を理解し、事例性を尊重した実践研究の態度を習得する。

第 1 回	臨床心理学研究の理念と研究方法の多様性
第 2 回	臨床心理学の諸領域と研究方法
第 3 回	臨床心理学の研究のプロセス
第 4 回	研究テーマと研究方法
第 5 回	臨床心理学の研究方法（1）実験法、検査法、および質問紙調査法
第 6 回	臨床心理学の研究方法（2）調査法、観察法、関与しながらの観察
第 7 回	臨床心理学の研究方法（3）面接法
第 8 回	臨床心理学の研究方法（4）アクションリサーチ、ナラティブ法など
第 9 回	量的研究のデザインと展開：具体的研究例を用いて
第 10 回	質的研究のデザインと展開：具体的研究例を用いて
第 11 回	質的研究の水準と質
第 12 回	事例研究という方法
第 13 回	臨床心理学における評価（効果）研究
第 14 回	臨床心理学における研究の倫理
第 15 回	臨床心理学研究法のまとめ、今後の見通しと課題

**履修上の注意**

受講者の積極的で主体的な参加を前提に、講義が進められる。そのためにも、各自が、研究テーマとしての自分の興味・関心を探り見出しそれを深めることが重要である。また、参考文献によって研究方法の全体像を把握しながら、自分の研究テーマにとって可能な具体的研究方法を探り、将来の必要に備えて、さまざまな研究手法を習得することが期待される。

**評価方法**

各自に割り当てられる報告資料の発表準備と討論などによる講義への参加の程度(50%)、期末のレポート課題の完成度(50%)によって、総合的に評価する。

**テキスト**

テキストは定めず、抄読用文献・参考文献などを必要に応じて、その都度指示する。

**授業概要**

教育に関する諸問題について、いじめ、学級経営、学習の動機づけ、教師の適性など幾つか絞りその現状と対応について文献により確認すると同時に、これに関する先行研究を取り上げ、最新の状況について理解と知識を深める。このような取り組みを通して教育問題について心理学的な視点に基づく深い洞察力を養い理解を深める。

**授業計画**

いじめ、教師の指導力、児童・生徒の学習への動機づけ、生徒と教師の信頼関係など教育の根幹をなす課題について現状を確認する。また、これに関する資料と論文の講読を通して問題と対応方法について理論的に追及し視点を広げる。内容によっては、さらに調べたことを発表しそれに基づいてディスカッションを通して理解を深める。またレポートを課すこともある。

第 1 回	教育心理学に関する現代的諸問題とその見方
第 2 回	心理学各領域の観点とその統合の必要性
第 3 回	いじめを捉える(1) いじめの現状とその原因、対応策について概観する
第 4 回	いじめを捉える(2) 家庭の養育環境について考える
第 5 回	いじめを捉える(3) 学校現場の教師のクラス経営の視点から予防を考える
第 6 回	学級経営と教師(1) ①教師に求められるもの ②学級集団の特性とその変化
第 7 回	学級経営と教師(2) ①効果的な指導方法とは ②何が効果的に作用するのか
第 8 回	学級経営と教師(3) ①リーダーシップとその理論 ②適切なリーダーシップ理論
第 9 回	学習の動機づけと動機づけ形成(1) ①内発的動機づけ ②自己調整学習
第 10 回	学習の動機づけと動機づけ形成(2) 親の関わりと子どもの学習への動機づけ
第 11 回	学習の動機づけと動機づけ形成(3) 友人関係と学習への動機づけ・学習方略
第 12 回	教師の適性(1)①生徒との良好な関係形成のために②効果的な授業展開のために
第 13 回	教師の適性(2)①生徒の把握の仕方と生徒の志気②不合理な信念と生徒との関係
第 14 回	教師のやる気と児童・生徒のモラール向上、学校の活性化へ向けて
第 15 回	まとめと話題提供

**履修上の注意**

内容的に最新の知識を扱うので、自ら関心を持って文献を調べるなど、積極的に参加すること。

**評価方法**

毎回の受講姿勢(積極性、発表の姿勢)、文献検索の内容、レポートなどを加味して総合的に評価する。

**テキスト**

特に使用しないが、その都度参考図書を紹介する。

**授業概要**

発達心理学と臨床心理学とは、表裏一体の密接な関係にある。発達心理学が人間の発達段階における標準的な発達基準や法則の解明をめざすのに対し、臨床心理学は発達のゆがみや遅れなど、いわゆる発達課題の未達成を発見し、未達成の背景や条件を解明することと平行して、それらのゆがみや遅れに対する支援（ケア）の方法を開発しようとする。本授業では、生涯発達の観点を持ちながら、成長期の子ども（乳児期、幼児前期、幼児後期、児童期、思春期から青年期）の発達課題に焦点をあて、その臨床心理学的理解を深めることを目的に講義をする。

**授業計画****到達目標**

1. 発達心理学と臨床心理学の関係について理解を深める。
2. 生涯発達心理学の観点から各年齢段階の発達課題について理解できる。
3. 発達課題の未達成に基づく子どもの問題行動や症状について多面的に理解することができる。
4. 問題行動や症状をもつ子どものへの支援について深く理解することができる。

第 1回	発達心理学と臨床心理学のリンクエージ
第 2回	生涯発達心理学（1）胎児、乳児、幼児、児童期
第 3回	生涯発達心理学（2）思春期、青年期、成人期、老年期
第 4回	乳児期の発達課題と臨床的問題(1)気質への配慮
第 5回	乳児期の発達課題と臨床的問題(2)アタッチメント、信頼感の獲得
第 6回	幼児前期の発達課題と臨床的問題(1)自律感の獲得
第 7回	幼児前期の発達課題と臨床的問題(2)セルフコントロールの形成
第 8回	幼児後期の発達課題と臨床的問題(1)自主性の形成
第 9回	幼児後期の発達課題と臨床的問題(2)内発的動機づけ体験
第 10回	児童期の発達課題と臨床的問題(1)幼児万能感の卒業
第 11回	児童期の発達課題と臨床的問題(2)現実的有能感の確立
第 12回	思春期の発達課題と臨床的問題(1)現実自己とあるべき自己との葛藤
第 13回	思春期の発達課題と臨床的問題(2)孤独とバッドセルフの受け入れ
第 14回	青年期の発達課題と臨床的問題(1)エゴアイデンティティの確立
第 15回	青年期の発達課題と臨床的問題(2)まとめとしての等身大の生き方の獲得

**履修上の注意**

授業中の質問や意見提出を歓迎する。

毎回、興味を持ったところや疑問に思ったところを尋ねるので、その心つもりで授業に参加すること。

**評価方法**

到達目標と関連して、授業で展開される質疑応答での発言内容(40%)、レポート課題の完成度(60%)などを総合して評価する。

**テキスト**

必要に応じてプリントを配布し、参考書を紹介する。

## 授業概要

胎児から成人までの発達を、身体・運動・認知・社会性・人格の各領域について相互関連的に概説するとともに、発達段階における心理臨床的課題やリスク、およびそれに対する支援および解決の方法を取り上げる。また、個性をもって生まれた一人の人間が、周りの人や環境との相互作用を通して成長していく、ダイナミックで柔軟な発達の様子が具体的にイメージできることを目指した講義をする。

## 授業計画

### 到達目標

1. 身体・運動・認知・社会性・人格に関する標準的な発達について理解を深める。
2. 発達の過程で生じる心理臨床的な課題について理解できる。
3. 心理臨床的な課題に対して、どのような支援の方法があるかを多面的に理解できる。
4. 1から3を踏まえて、個別事例に対する適切な心理臨床的支援を立案できる。

第 1回	発達臨床心理学の意義
第 2回	胎生期の発達と周産期の母親のメンタルヘルス
第 3回	乳児期の発達と心理臨床的課題
第 4回	アタッチメントの形成と障害
第 5回	幼児期の発達課題と心理臨床的課題
第 6回	ことばの獲得に関する課題
第 7回	養育に関する諸問題と養育者への心理教育と支援
第 8回	児童期の発達課題と心理臨床的課題と支援の視点
第 9回	児童期のメンタルヘルスに関する諸問題
第 10回	青年期の発達課題と心理臨床的課題と支援の視点
第 11回	青年期のメンタルヘルスに関する諸問題
第 12回	成人期の発達課題と心理臨床的課題と支援の視点
第 13回	成人期のメンタルヘルスに関する諸問題
第 14回	家族の発達とその支援
第 15回	授業のまとめ

## 履修上の注意

講義内容から、自らの今までの生活を振り返ることになる。そうした前提のもとで積極的に学び、質問や意見などのフィードバックをして欲しい。また、ニュースなどで取り上げられる事例にも目を向けて、学びと現実の世界をつなげてよりリアルな発達臨床の様子をイメージ出来るよう理解を深めて欲しい。なお、適宜講義内容に即して自己学習の提出物が求められる。

## 評価方法

到達目標に照らし、授業中の発言や質疑応答（30%）、提出物（20%）、期末レポート内容（50%）で総合的に評価する。

## テキスト

教科書は特に指定しない。各回に配布する資料に基づいて授業を進める。また、講義の中で参考書を隨時紹介する。

**指導概要**

人格とは何か、また、臨床実践の中でクライエントの問題や症状の基礎にある人格をどのように理解し、それにどのように介入することができるのかについて学ぶ。精神分析学、対象関係論の観点を導入することで、人格の査定・アセスメント、心理療法やカウンセリングにおける治療的人格変容についてどのように理解することができるのかについて論じる。適宜、臨床事例を用いて解説を加える。

**指導計画****到達目標**

1. 臨床実践に役立つ人格理論、人格発達、人格病理について理解する。
2. クライエントの人格の病理と統合や成長について対象関係論の観点から学ぶ。
3. 精神分析的心理療法における人格変容と心理的成長について理解する。

第 1回	人格 (Personality) とは何か
第 2回	人格の構造論、発達論、人格の力動論、適応論
第 3回	トピック
第 4回	本能、欲動、空想、対象関係
第 5回	転移と逆転移
第 6回	解釈と洞察、治療的人格変容
第 7回	トピック
第 8回	妄想分裂ポジション、迫害不安、原始的防衛機制
第 9回	羨望、妄想分裂ポジションの精神病理
第 10回	抑うつポジション
第 11回	抑うつ不安、躁的防衛、償い
第 12回	トピック
第 13回	治療的人格変容の実際 1
第 14回	治療的人格変容の実際 2
第 15回	トピック

**履修上の注意**

1. 質疑や感想、意見などを交換しながら、理解を深めることが期待される。

**評価方法**

授業での質疑応答への積極的な関与(30%)、小グループ討論や体験学習への参加(30%)、課題レポートの完成度(40%)などに基づいて総合的に評価する。

**テキスト**

資料については、適宜、教室で配布する。

参考図書：H.スィーガル著、『メラニー・クライン入門』岩崎学術出版社。

**授業概要**

人間関係学特論では、まず人間関係学の理論的枠組みとその臨床的な応用方法について学習する。次いで、重要な他者、感情、役割、喪失と孤立などの対人的要因が人間関係づくりに重要な機能を担っていることを範示事例などから理解する。後半では、人間関係学の臨床的展開として、ワークやロールプレイなどを多用して、人間関係学の理論と実践を具体的で明確に理解できるよう講義を行う。

**授業計画****到達目標**

- 前半では、まず人間関係学の理論的基盤を概説し、次いで範示事例等を通して重要な他者、感情、役割、喪失などの要因が人間関係形成にどのような影響を及ぼすかについて学ぶ。
- 後半では、上記の要因が心理臨床の中でどのように位置づけられるかを理解し、ワークやロールプレイを通して望ましい人間関係づくりのための援助方法を習得する。

(第1回～第8回：小山 望)

第 1 回	人間関係学とは何か—その理論と方法
第 2 回	心理臨床における人間関係学の位置づけ
第 3 回	人間関係学が扱う要因—重要な他者、感情、役割、喪失
第 4 回	人間関係における「重要な他者」の役割
第 5 回	人間関係における「感情」の役割—怒りと不安
第 6 回	人間関係における「役割」の対立—対人葛藤とパワーゲーム
第 7 回	人間関係における「喪失」—関係変化がもたらす感情
第 8 回	人間関係の回復—喪失と孤立からの立ち直り
第 9 回	授業前半のまとめ

(第10回～第15回：羽鳥健司)

第 10 回	人間関係学に基づく援助法の展開—方向づけとワーク実施上の留意
第 11 回	人間関係を育む感情調節過程(1)—怒りと不安を手放すワーク
第 12 回	人間関係を育む感情調節過程(2)—悲嘆と抑うつを手放すワーク
第 13 回	人間関係の回復と新しい関係づくり—他者視点の気づきをつくるワーク
第 14 回	人間関係を扱う心理療法の今後の展望と問題点
第 15 回	授業全体のまとめ

**履修上の注意**

授業は、講義だけでなく体験学習も取り入れて行うので、積極的に参加することが望まれる。事前に配布された資料は読んでおくこと。

**評価方法**

- 本授業は、2名の教員によるオムニバス形式の授業であるため、教員ごとに評価がなされるが、単位認定にあたっては総合的に評価される。
- 授業での質疑討論と授業中に用いたワークシートの記述内容(30%)、ロールプレイにおける関与度(30%)、提出された課題レポートの完成度(40%)などから、目標の達成度を総合的に評価する。

**テキスト**

適宜 配布資料を用意する。

**授業概要**

臨床心理士やカウンセラーに必要な心身医学の主要な知識について理解を深める。 主要な精神症状と問題行動、精神疾患について講義する。さらに、心身医学と産業精神保健の2テーマについて学習する。講義による知識の習得だけでなく、事例検討を通して、臨床で役立つ実力を養う。心療内科外来診療の陪席実習は、医療の現場を紹介する中で、マンツーマンで実地指導する。毎回、メール相談事例を提出し、回答を考える。カウンセラーとしてのセンスを養うよう講義する。

**授業計画**

## 到達目標

1. 心身医学の中心的な考えについて理解する。
2. ストレス関連疾患に対する病態の把握と具体的な援助技法について説明できる。
3. 産業精神保健におけるストレス理論を理解し、その適切な臨床応用を考えることが出来る。
4. 講義とメール相談、陪席等を通して、臨床心理士として将来役立つ心身医学と産業精神保健の知識と技術を修得する。

第 1回	講義ガイダンス メール相談の実際
第 2回	心身医学と精神医学の関連性
第 3回	心身医学（1）心身医学の概念、専門領域の発展
第 4回	心身医学（2）心身医学の対象、心身相関のメカニズム
第 5回	心身医学（3）心身症における治療法
第 6回	産業精神保健（1）職場のメンタルヘルスの現状と課題
第 7回	産業精神保健（2）職業性ストレスモデル
第 8回	心療内科外来陪席実習（1）精神科と心療内科とメンタルヘルスセンター
第 9回	心療内科外来陪席実習（2）気づきとセルフコントロール
第 10回	心療内科外来陪席実習（3）ライフスタイルとサポーター
第 11回	心療内科外来陪席実習（4）全人的医療
第 12回	心療内科外来陪席実習（5）治療的自己の形成
第 13回	心療内科外来陪席実習（6）勤労者医療（働くことの意味）
第 14回	心療内科外来陪席実習（7）予防医療（一次予防、二次予防、三次予防）
第 15回	まとめ

**履修上の注意**

1. 授業の中で何を学んだかを毎回復習レポートで確認するので、目的意識を持って授業に取り組むことを期待する。
2. 毎回提示するメール相談事例への回答を通して臨床的感性を高めることを期待する。

**評価方法**

1. 授業の中で展開される質疑応答の様子、提出したレポートの内容などから総合的に評価する。
2. 受講生自身のメンタルヘルスに関するセルフケアへの配慮状況も評価の一つとなる。
3. メール相談に対する回答内容を踏まえて、心理的援助者としての実践能力と態度も評価する。

**テキスト**

参考文献・DVDとして、山本・曾田（共著）「メンタルヘルス対策の本」（労務行政）、桃谷・山本（共著）「心とからだの健康教室」（新興医学出版社）、山本・江花「メンタルヘルス・セルフチェック」（ぎょうせい）、「Dr. 山本晴義の実戦！心療内科」（DVD2巻、ケアネット）、山本（監修）「元気な職場をつくるメンタルヘルス」（DVD全10巻、アスパクリエイト）他

## 授業概要

精神医学の歴史や主な精神障害の概念、治療的な面接法、文学や芸術、文化的活動などとの関わりなど、精神医学全般に渡る講義を行う。それを踏まえて精神医学の中でも臨床上特に重要な位置を占める統合失調症、うつ病、認知症を中心に、実際の臨床場面で患者・家族にどのように接すればよいかという観点から、精神疾患に関する実践的な知識や対応能力が身につくように講義する。

## 授業計画

### 到達目標

1. 精神医学の中心概念について深く理解する。
2. 精神医学的な面接法や精神療法について深く理解できる。
3. 臨床上特に重要な精神障害についての理解を深め、実践的な対応能力を修得できる。
4. 社会や文化と精神医学の関わりを幅広く理解できる。

第 1回	精神医学の歴史
第 2回	精神障害の概要—診断基準—
第 3回	精神医学的面接と倫理的配慮
第 4回	統合失調症の概念
第 5回	統合失調症の症状と経過
第 6回	統合失調症の治療
第 7回	事例検討
第 8回	うつ病・躁うつ病の概念
第 9回	うつ病・躁うつ病の症状と経過
第 10回	うつ病・躁うつ病の治療
第 11回	認知症の概念
第 12回	認知症の症状と経過
第 13回	認知症の治療
第 14回	地域精神医療・保健
第 15回	文学・芸術と精神医学

## 履修上の注意

1. 各自分が臨床的・実践的な関心や問題意識をもって授業に出席するとともに、関連領域の書籍や論文を自発的に読み進むことが望ましい。
2. 講義に際しては、様々な臨床場面を想定して、実際にどのように患者・家族に対応したらよいかという事例的な検討が頻回になされるので、積極的に参加・発言する姿勢が期待される。

## 評価方法

到達目標と関連して、授業中の発言などの参加度と理解度(40%)、提出されたレポート内容(60%)などを通じて総合的に評価する。

## テキスト

講義内容に関連した参考文献や資料をその都度紹介・配付する。

## 授業概要

講義では、主に犯罪・非行心理学の中でも、非行少年や犯罪者の更生に役立つような知識を身につけさせる。その際には、非行少年や犯罪者の成長や自己実現の促進だけでなく、その再非行・再犯を防止するといった観点から、臨床心理士やカウンセラーが果たすことができる役割と、陥りやすい弱点について説明する。さらに、犯罪被害者の精神的被害についても触れ、加害者と被害者双方の心理学的課題についても説明する。また、できるだけ実証的な調査研究から得られた知見を紹介し、実際に再非行・再犯の抑止に結びつくような介入の在り方の習得を目指した講義をする。

## 授業計画

### 到達目標

1. 犯罪・非行心理学の考え方やアプローチについて理解する
2. 犯罪・非行心理学的な援助技法およびアセスメントについて具体的に説明できる
3. 様々な犯罪・非行心理臨床の現場とその実践の独自性について説明できる
4. 犯罪被害者の精神的被害について説明できる

第 1回	犯罪・非行心理学とは何か：今日的特徴
第 2回	犯罪・非行研究の理論的発展と実際
第 3回	犯罪・非行とパーソナリティ
第 4回	犯罪・非行と発達障害
第 5回	犯罪・非行と家族関係
第 6回	犯罪・非行と学校・職場・地域
第 7回	犯罪・非行の心理臨床
第 8回	犯罪者・非行少年の処遇システム
第 9回	犯罪者・非行少年のアセスメント
第 10回	犯罪者・非行少年のカウンセリング
第 11回	犯罪者・非行少年の治療教育
第 12回	犯罪者・非行少年の家族支援
第 13回	犯罪・非行の態様と介入方法
第 14回	犯罪被害者の精神的被害
第 15回	まとめ：犯罪・非行心理学の課題と展望

## 履修上の注意

1. 授業ガイドで紹介する参考文献等を主体的に自学自習し、問題意識を深めること。
2. 講義に際しては積極的に発言し、教員との意見交換を行い、受講生同士の相互の理解に務めることが期待される。

## 評価方法

到達目標と関連して、授業中の発言等の参加度と理解度(40%)、提出されたレポート内容(60%)などを通じて総合的に評価する。

## テキスト

講義内容に関連した参考文献を適宜紹介し、ハンドアウト資料を配付する。

**授業概要**

臨床健康心理学の目標は、個人が不適応的な状態に陥らないように予防すること、さらにその視点を集団や社会にまで広げ、個人や集団が有する長所や強みを伸ばすことによって、個人と集団の QOL や well-being を維持、向上できるよう支援することである。この授業では、健康心理学の先進的な理論とその臨床的応用のための具体的方法について講義する。

**授業計画****到達目標**

- 前半では、臨床心理学と健康心理学との共通点と相違点について学ぶ。さらに、生活習慣関連の健康リスク問題、個人次元と集団次元のストレス対処、病気対処行動、健康心理学の臨床的展開について学び、その意義を理解することができる。
- 後半では、“ポジティビティ(positivity)”をキーワードに、我々の QOL、well-being の維持向上の問題を考える。具体的には、well-being 向上のためのポジティブ心理療法の最前線を学び、従来の心理療法との比較から、その有効性と限界について理解できる。

(第1回～第7回：小玉正博)

第 1 回	臨床健康心理学とは何か：その基本視点、対象、アプローチ
第 2 回	生活習慣関連の心身健康リスク問題
第 3 回	ストレスとその対処（1）：個人次元の課題
第 4 回	ストレスとその対処（2）：集団次元の課題
第 5 回	病気対処行動：ヘルスケアの視点とその意義
第 6 回	健康心理学の臨床的展開（1）：循環系疾患を中心にして
第 7 回	健康心理学の臨床的展開（2）：ガン疾患を中心にして

(第8回～第15回：羽鳥健司)

第 8 回	ポジティビティとは何か：成長モデルと機械モデルの違い
第 9 回	positivity ratio: ポジティブが多く、ネガティブが少なければ「よい」のか
第 10 回	ポジティブ心理療法(positive psychotherapy)の紹介
第 11 回	ポジティブ心理療法（1）：肯定的感情の視点から
第 12 回	ポジティブ心理療法（2）：人が持つ強みの視点から
第 13 回	ポジティブ心理療法（3）：伝統的な心理療法との共通点と相違点
第 14 回	ポジティブ心理療法の臨床的応用：うつ病患者への介入
第 15 回	臨床健康心理学のまとめ

**履修上の注意**

- 授業ガイドでは本授業で扱うトピックスを理解するための基本文献等を紹介するので、受講者はそれらを参考にしながら、主体的に自学自習し、問題意識を深めること。
- 講義に際しては積極的に発言し、教員と意見交換を行い、受講生相互の理解に務めること。

**評価方法**

- 到達目標と関連して、授業中の発言内容（20%）、ワークへの参加度（30%）、提出されたレポート内容（50%）などから評価する。
- 本授業は、2名の教員によるオムニバス形式の授業であるため、教員ごとに評価がなされるが、単位認定にあたっては総合的に評価される。

**テキスト**

授業内容に関連した参考文献を適宜紹介するとともにハンドアウト資料を配付するが、事前学習と事後学習のために以下の文献を紹介する。

「現代のエスプリ 健康心理学」(ぎょうせい)、「現代のエスプリ ポジティブ心理学の展開」(ぎょうせい)、「ポジティブ心理学」(ナカニシヤ出版)

**授業概要**

心理療法の技法には、大きく認知行動的側面を扱う立場、人間関係を重視する立場、感情や無意識などの心理力動性を扱う立場がある。それぞれの立場に立つ者が、その理論的根拠に基づいた臨床事例を取り上げ、各技法の特徴、適応範囲、心理査定、連携の在り方などについて今日の研究知見を踏まえて講義をする。

**授業計画****到達目標**

1. 現在の代表的心理治療技法の基礎理論とその事例的展開について理解することができる。
2. 各理論と技法の特徴と適応範囲について簡潔に説明することができる。
3. 具体的事例を通して定式化と問題解決への方向性を考えることができる。

(第1回～第5回：小玉正博担当)

認知行動療法の理論と技法について、具体的な事例を中心にして、その適応範囲あるいは限界について解説し、討論する。

第 1 回	行動療法および認知行動療法の概略
第 2 回	精神病理と治療モデル
第 3 回	適用事例(1)：情緒的問題を中心に
第 4 回	適用事例(2)：行動的問題を中心に
第 5 回	行動療法の有用性と批判

(第6回～第10回：小山 望担当)

来談者中心療法の理論と技法について、具体的な事例を中心にして、その適応範囲あるいは限界について解説し、討論する。

第 6 回	来談者中心療法の理論の概略
第 7 回	談者中心理論の技法について
第 8 回	来談者中心理論を背景にした遊戯療法（児童対象）
第 9 回	来談者中心療法の事例
第 10 回	来談者中心療法の効用と限界

(第11回～第15回：佐々木美恵担当)

精神分析的心理療法の理論と技法について、具体的な事例を中心にして、その適応範囲あるいは限界について解説し、討論する。

第 11 回	精神分析的心理療法の依拠する理論解説
第 12 回	治療構造論・心理療法のセッティング
第 13 回	見立てと治療契約
第 14 回	事例からの理解
第 15 回	精神分析的心理療法の適応範囲と限界

**履修上の注意**

1. ガイダンスで紹介する参考文献等を主体的に自学自習し、問題意識を深めること。
2. 講義に際しては積極的に教員との意見交換を行い、受講生同士の相互の理解に務めること。

**評価方法**

1. 本授業は、3名の教員によるオムニバス形式の授業であるため、教員ごとに評価がなされるが、単位認定にあたっては総合的に評価される。
2. 評価の観点は、到達目標と関連して授業中の発言等による理解度(40%)、提出された課題レポートの完成度(60%)などが重視される。

**テキスト**

内容に関連した参考文献や映像資料を適宜紹介するとともに、ハンドアウト資料を配付する。

**授業概要**

人間の生涯的発達の中で、特に老年期に焦点を当てる。具体的には、生まれてから死ぬまでの生涯発達の過程における老年期の位置づけ、その心理的な意味、老いるとはどういうことなのかについて基本的理解を得る。また、加齢に伴い身体機能、知的機能はどう変化し、そのことが日常生活上にどのような変化をもたらすのかという問い合わせについて、現時点での研究知見を踏まえた上で、問題を抱えた高齢者をどのように理解し、対応したらいいのかに焦点づけ、詳細な事例検討も含めて講義する。

**授業計画****到達目標**

1. 生涯発達的視点から見た老年期の心理的な特徴について概説できる。
2. 老年期の一般的な心身の変化が日常生活に及ぼす影響について説明できる。
3. 様々な高齢者に対する個別の理解、対応のあり方について理解できる。
4. ケアを必要とする高齢者の理解、支援のあり方について理解できる。

第 1回	生涯発達的視点から見た老年期
第 2回	老いるということ 1：身体機能の変化
第 3回	老いるということ 2：感覚機能の変化
第 4回	老いるということ 3：心理的適応
第 5回	知的機能のエイジング 1：加齢変化
第 6回	知的機能のエイジング 2：アセスメント
第 7回	知的機能のエイジング 3：機能維持の方略
第 8回	老年期の心理的な特徴（まとめ）
第 9回	高齢者に対する心理的理と支援 1：支援のための方法論
第 10回	高齢者に対する心理的理と支援 2：事例・在宅高齢者（家族同居）
第 11回	高齢者に対する心理的理と支援 3：事例・在宅高齢者（一人暮らし）
第 12回	高齢者に対する心理的理と支援 4：事例・認知症高齢者（アルツハイマー型）
第 13回	高齢者に対する心理的理と支援 5：事例・認知症高齢者（レビー小体型）
第 14回	高齢者に対する心理的理と支援 6：事例・施設利用の高齢者
第 15回	高齢者に対する心理的理と支援（まとめ）

**履修上の注意**

1. 授業ガイドで紹介するテキスト、参考文献等を主体的に予習し、問題意識を深めること。
2. 講義では教員および他の受講生と積極的な意見交換を行い、授業を作るよう努めること。
3. 事例の検討にあたっては受講者同士のグループワークによる討論が行われるので、積極的に参加すること。

**評価方法**

到達目標と関連して、授業中に課されるミニレポートの内容(30%)、発言等の参加度と理解度(30%)、適宜出される課題レポートの内容(40%)などにより総合的に評価する。

**テキスト**

「エピソードでつかむ老年心理学 大川他編 ミネルヴァ書房 2011」を使用する。また、授業の内容に応じたレジュメ、資料等を適宜配布する。参考書等は、授業時、適宜、紹介する。

**授業概要**

障害者（児）分野での心理臨床については、福祉施設での療育やリハビリテーション、子育て支援や保育、教育における特別支援教育、さらに余暇活動や就業など他領域と何らかに関わる。また家族や保護者支援とも関わる。この授業では、障害が関わる代表的な領域での心理臨床に焦点を当て、それぞれの領域での心理臨床の意義や特徴を理解するようとする。関係の深い障害ごとの心理的な特徴とその心理臨床も取り上げ、有効な心理臨床への方向付けも図るようにする。

**授業計画****到達目標**

- 1 障害者（児）が関係する諸領域での心理臨床の特徴や内容を理解する。
- 2 さまざまな障害の心理的な特徴と心理臨床について理解する。
- 3 障害者（児）の家族支援、保護者支援についても理解する。

第1回	障害者（児）の関係する諸領域とライフスパン
第2回	さまざまな障害と心理臨床的なニーズ
第3回	乳幼児期の問題と心理臨床
第4回	特別支援教育の現状と障害の心理臨床
第5回	障害者の就労・余暇活動と心理臨床
第6回	障害者（児）の家族・保護者支援と心理臨床
第7回	視覚障害・聴覚障害の心理
第8回	知的障害の心理
第9回	身体障害・健康障害の心理
第10回	発達障害の心理～1
第11回	発達障害の心理～2
第12回	障害の発達相談・子育て支援と心理臨床
第13回	障害の教育相談・進路支援と心理臨床
第14回	障害の生活支援・就労支援と心理臨床
第15回	まとめと各自の課題生理

**履修上の注意**

- 1 障害は一見、身近ではないかもしれないが、普遍的な課題でもあるので、自身の問題意識を確認するところから始めたい。障害への問題意識を尋ねるのでそのつもりで受講されたい。
- 2 映像も入れたい。感想や意見を求めるのでそのつもりで受講されたい。

**評価方法**

授業中のリアクションペーパー・理解度（40%）、期末レポート（60%）で総合的に評価する。

**テキスト**

特に用いない。関連資料を配布する。

**授業概要**

スクール・カウンセラーにとって必要とされる学校臨床心理学の知識と実践力を習得することを目的とする。主要なテーマとして、学校へスクール・カウンセラーとしての入り方、児童生徒へのカウンセリングを実施する際の留意すべき点、担当したケースの報告をするときの留意点、教師への援助、保護者への援助、危機対応、校内研修のあり方などの常に学校において話題となる実際的課題を取り上げる。また、不登校、いじめなどの事例に対する具体的対応について詳細かつ多面的に講義する。さらに、ロールプレイなどを通して学校臨床場面について体験的学習を行う。

**授業計画****到達目標**

1. 学校臨床心理学に必要な知識を習得することができる。
2. 学校臨床に必要な実践力を身につけることができる。
3. 不登校、いじめなどの具体事例の学習を通して問題行動への対応を身につけることができる。
4. 学校外の相談機関との連携のあり方について理解できる。

第 1回	オリエンテーション：授業の進め方、評価方法の説明、参考文献の紹介
第 2回	スクール・カウンセラーとして学校に入る際の留意点
第 3回	児童生徒へのカウンセリングを実施する際の留意点
第 4回	教師との連携をはかる際の留意点
第 5回	保護者への援助を行う際の留意点
第 6回	危機対応の際の留意点
第 7回	学外諸機関との連携
第 8回	学校における事例検討会の持ち方：インシデント・プロセス法を参考に
第 9回	校内研修の進め方
第 10回	不登校児童生徒への対応①：非社会的な事例
第 11回	不登校児童生徒への対応②：反社会的な事例
第 12回	不登校児童生徒への対応③：適応指導教室の意味と役割
第 13回	いじめに対する対応①：被害者の視点から
第 14回	いじめに対する対応②：加害者の視点から
第 15回	講義を振り返り、受講者自身の今後の課題などについて明確にする

**履修上の注意**

1. 各自が実践的な関心や問題意識をもって授業に出席すること。
2. 講義に際しては、学校関連の様々な場面を想定して、どのように対応したらよいかという事例的な検討が頻回になされるので、積極的に参加・発言することを期待する。

**評価方法**

到達目標と関連して、授業の中で展開される質疑応答への取り組み方(40%)、課題レポートの完成度(60%)によって評価する。

**テキスト**

テキストは特に指定しないが、授業の進行に伴い必要と思われる文献を適宜紹介していく。

**授業概要**

グループワークについて理論と実践の両面から学ぶ。グループワークのなかにはソーシャルスキル教育、ロールプレイ、対人関係ゲーム、構成的グループエンカウンターなどが含まれている。それぞれの理論的背景、実施方法などを講義、演習を交えながら指導する。演習のなかで実際にグループワークの各技法を深く体験することで、その長所・短所を十分理解しながら将来学校現場または臨床現場において適切に導入できるように講義をする。

**授業計画****到達目標**

1. グループワークの概念と理論的背景を理解する。
2. グループワークの各手法（ロールプレイ、構成的グループエンカウンター、対人関係ゲーム、ソーシャルスキル教育）の概念と特徴を理解し、実際のワーク体験を通してその効果的な適用方法を習得する。
3. 本講義で学んだワーク・プログラムを実際に活用してグループワークを運営、展開できる。

第 1 回	グループワークの考え方とその実践的展開
第 2 回	心理臨床におけるグループワークの意義
第 3 回	具体例紹介①：ロールプレイの概念と理論的背景
第 4 回	実践：ロールプレイを体験し、気づきや感想、考察を発表する
第 5 回	具体例紹介②：構成的グループエンカウンターの概念と理論的背景
第 6 回	実践：構成的グループエンカウンターを体験する
第 7 回	振り返り：体験した気づきや感想、考察を発表する
第 8 回	具体例紹介③：対人関係ゲームの概念と理論的背景
第 9 回	実践：対人関係ゲームを体験する
第 10 回	振り返り：体験した気づきや感想、考察を発表する
第 11 回	具体例紹介④：ソーシャルスキル教育の概念と理論的背景
第 12 回	実践：ソーシャルスキル教育の実際の様子をVTRで学ぶ
第 13 回	実践：ソーシャルスキル教育を体験する
第 14 回	振り返り：体験した気づきや感想、考察を発表する
第 15 回	学習の振り返りとレポート課題の提示

**履修上の注意**

1. 本講義において各受講者に求められるのは、単にグループワークに関わる知識の習得を目指すのではなく、お互いを認め、尊重するという人間関係への基本姿勢を学ぶことである。
2. そのためには、グループワークにおいて自身が傷ついたり、他者を傷つけることなく、率直で真摯な態度で協同して授業を作り上げる態度で参加して欲しい。

**評価方法**

到達目標と関連して、授業への参加意欲や態度(50%)およびレポート課題の完成度(50%)などで評価する。

**テキスト**

- ・ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 図書文化
- ・対人関係ゲームによる仲間づくり 金子書房
- ・小学校学級づくり・構成的グループエンカウンター・エクササイズ 50 選 明治図書
- ・改訂版 アサーション・トレーニング さわやかな〈自己表現〉のために 金子書房
- などを必要に応じて紹介する

**授業概要**

コミュニケーションと相互影響のある概念を抽出し、それらをさまざまなコミュニケーション状況でとらえることにより、日常の風景と異なる新たな視点でのコミュニケーション理解を目的とする。影響要因として、飲酒・喫煙、いじめなどネガティブ行動に影響がある刺激欲求と権威勾配をとりあげる。これら概念の活用によっては、コミュニケーションがポジティブな影響（ストレス低減、意欲の増大）を及ぼすことの理解を目指して講義する。

**授業計画****到達目標**

1. コミュニケーションの意義、対面・非対面の特徴を理解できる。
2. 欲求がコミュニケーションに関与し、どのようにネガティブ行動を引き起こすか、そのプロセスを理解することができる。
3. コミュニケーションによって作られた権威勾配状況で行動への影響を理解することができる。
4. ポジティブ行動を生むコミュニケーションについて理解することができる。

第 1回	コミュニケーション研究の意義
第 2回	対面的コミュニケーションと非対面的コミュニケーションの構造上の違いと機能の違い
第 3回	性格や態度などの個人特性と対面的・非対面的コミュニケーションとの相互関係
第 4回	コミュニケーションと相互関係にある概念①（刺激欲求）の理解
第 5回	対面的コミュニケーションと刺激欲求-若者の飲酒、喫煙の問題
第 6回	非対面的コミュニケーションと刺激欲求①-ネット上における非倫理的行動
第 7回	非対面的コミュニケーションと刺激欲求②-multi task と携帯電話の問題
第 8回	コミュニケーションが作り上げる組織風土
第 9回	コミュニケーションと相互関係にある概念②（権威勾配）の理解
第 10回	対面的コミュニケーションと権威勾配①-組織（学校、企業）のいじめ、体罰などの不健康問題
第 11回	対面的コミュニケーションと権威勾配②-医療ミスの権威勾配による影響
第 12回	非対面的コミュニケーションと権威勾配-ネットのいじめやフレーミング
第 13回	コミュニケーションによるポジティブな影響①-ソーシャルスキルと刺激欲求
第 14回	コミュニケーションによるポジティブな影響②-権威勾配の修正
第 15回	総合的な考察

**履修上の注意**

1. 授業時に紹介する文献を十分に学習し、理解しておくことを期待する。
2. 積極的に議論に参加し、受講者自身で授業を作る気持ちで臨むことを期待する。

**評価方法**

到達目標に照らして、授業での発言を通して積極的参加度(25%)、到達目標の各事項の理解度(25%)、課題レポート(50%)によって判断し、総合評価を行う。

**テキスト**

授業時に資料を毎回配布するので、特にテキストはない。参考文献については、適宜紹介する。

**授業概要**

臨床心理士の主要業務の一つである臨床心理的地域援助の中核を成す分野はコミュニティ心理学である。コミュニティ心理学は治療モデルを中心とするのではなく、予防やコミュニティ資源の向上、非専門家の活動に対する側面的援助、多様な活動・サービス間の連携、間接的援助、プログラムの開発と評価等、個人心理臨床からの発想の転換を要求される領域である。この授業においては、コミュニティ心理学の主要概念を学習すると共に、国内外における主要な実践・研究についてレビューを行う。それを基にして、学生各自が将来コミュニティ心理学に関連した実践・研究を行う上で助力となるよう、考察を深める。講義、ビデオ視聴に加えて、学生による発表と、小グループによるディスカッションなども適宜用いる予定である。

**授業計画****到達目標**

1. コミュニティ心理学の主要概念を理解する。
2. 臨床心理士の業務におけるコミュニティ心理学の役割について基礎的な理解を得、コミュニティ心理学の知識を自分自身の今後の臨床業務においてどのように用いるか、具体的に考察できる。なお、集中講義のため、受講人数と進捗状況に合わせて、適宜調整しながら授業を行う。

第1回	授業オリエンテーション、コミュニティ心理学の定義と考え方
第2回	コミュニティ心理学の実践例紹介：HIV 感染にかかる援助実践から
第3回	予防の理論的側面
第4回	予防とコミュニティ資源の向上に関する具体的な取り組み
第5回	サポートグループとセルフヘルプグループの具体例
第6回	サポートグループとセルフヘルプグループの機能
第7回	コミュニティ援助プログラムの開発と評価の概要
第8回	コミュニティ援助プログラムの開発と評価の具体例
第9回	コンサルテーションの理論的側面
第10回	コンサルテーションの実践的側面
第11回	学生による発表とディスカッション
第12回	学生による発表とディスカッション
第13回	学生による発表とディスカッション
第14回	学生による発表とディスカッション
第15回	まとめ

**履修上の注意**

受講生は、臨床心理学に関する基礎的な科目を履修済みであること。指定されたテキストや文献等は各自読んでおくこと。中途で履修を放棄したりするのではなく、積極的に授業に参加することが求められる。

**評価方法**

- ①クラスにおける発表（20%）
- ②学期末レポート（40%）：学生は、将来自分が勤務すると予想される（希望する）領域（学校、心療内科、学生相談、EAP 等）において、コミュニティアプローチをどのように用いていきたいか、具体的な内容をレポートにまとめ、提出する。先行研究を十分に吟味しながら論を進めること。その内容に関連すると思われるコミュニティ資源についても必ず触れること。A4 判用紙 5 枚以内。字数は問わない。
- ③授業への参加状況（40%）：やむを得ず遅刻あるいは欠席をする場合は、できるだけ事前に講師に申し出ること。それ以外の遅刻・欠席は減点の対象となるので注意すること。

**テキスト**

金沢吉展(2004)『臨床心理学全書第 11 卷：臨床心理的コミュニティ援助論』誠信書房

**授業概要**

臨床社会心理学では、臨床心理学と社会心理学のインターフェイスの領域を、主に社会心理学的アプローチから説明、理解しようとする。これらの領域には、不適応な行動や感情について、①その発現と維持における自己過程、②その評価や診断に関わる認知過程、そして③その治療や予防の対人過程などがあげられる。本講義では、これらの諸過程について最新の研究知見を示すとともに、具体的な例を取り上げながら講義をする。

**授業計画****到達目標**

1. 不適応な行動や感情の発現と維持における自己過程について理解することができる。
2. 不適応な行動や感情の評価や診断に関わる帰属過程について説明することができる。
3. がん患者と家族への心理社会的介入を例に、その治療や予防における対人過程（ソーシャルサポート、集団力学など）について理解を深めることができる。

第 1回	オリエンテーション：臨床社会心理学というアプローチの特徴
第 2回	不適応の発現・維持に関する自己過程 1：自己意識の発生と病理
第 3回	不適応の発現・維持に関する自己過程 2：自己注目と抑うつ
第 4回	不適応の発現・維持に関する自己過程 3：自己評価と自尊感情
第 5回	不適応の発現・維持に関する自己過程 4：自己呈示と社交不安
第 6回	不適応の発現・維持に関する自己過程 5：自己開示と心身の健康
第 7回	不適応の評価・診断に関する社会認知過程 1：帰属過程
第 8回	不適応の評価・診断に関する社会認知過程 2：推論バイアス、コントロール知覚
第 9回	不適応の評価・診断に関する社会認知的過程 3：ストレスとその評価
第 10回	治療や予防を高める対人過程 1：ソーシャルサポート
第 11回	治療や予防を高める対人過程 2：治療者のメッセージ
第 12回	治療や予防を高める対人過程 3：がん患者や家族への心理社会的介入 1
第 13回	治療や予防を高める対人過程 4：がん患者や家族への心理社会的介入 2（グループダイナミックスからグループ療法へ）
第 14回	臨床社会心理学のさらなる課題：地域連携と支援（病と共に生きること）
第 15回	授業のまとめ

**履修上の注意**

1. 授業中に適宜参考文献等を紹介するので、それをもとに学習を進めること。
2. 講義に際しては積極的に発言し、教員との意見交換を行い、受講生同士の相互の理解に務めることが期待される。

**評価方法**

到達目標と関連して、授業中の質疑応答から見られる理解度と参加度(40%)、提出されたレポートの完成度(60%)などを通して総合的に評価する。

**テキスト**

授業中に適宜参考文献等を紹介する。参考書としては、以下があげられる。『不適応と臨床の社会心理学』（誠信書房）『臨床社会心理学』（ナカニシヤ出版）、『臨床社会心理学の進歩』（北大路書房）『はじめての臨床社会心理学』（有斐閣）『臨床社会心理学』（東京大学出版）他

## 授業概要

グローバル化のなかで増加しつつある文化間移動や異文化接触によって生じる心理的現象、さらに多文化環境で成長することによるこころの問題の理解と深化を目的とする。また、異文化の問題には、国内の地域差や世代差も含まれることを理解し、異文化への理解が地域支援と密接に関連していることを学習する。具体的には、異なる文化的背景をもつ人々（国際結婚家族、外国人労働者家族など）を取り上げ、異文化適応、言語・文化習得の問題、自我アイデンティティ・文化的アイデンティティ形成などに関する最新の知見について講義する。

## 授業計画

### 到達目標

1. 文化的要因が人のこころに与える影響と問題点を把握することができる。
2. 異文化接触と文化間移動がどのような心理的現象をもたらし、自我アイデンティティと文化的アイデンティティの形成にどのように影響するかを理解できる。
3. 異文化間心理学の知識と理論が地域支援に有用であることを認識できる。
4. 異文化理解の方法論が地域支援の理解の視点と密接に関連することを理解できる。

第 1回	授業概要および異文化間心理学の課題
第 2回	心理学における異文化問題とは何か
第 3回	文化がこころに及ぼす影響
第 4回	異文化間心理学研究の方法論的問題(1)エスノセントリズムへの対応
第 5回	異文化間心理学研究の方法論的問題(2)個人主義と集団主義のとらえ方
第 6回	異なる文化的背景をもつ人々：現代社会の多様性への理解
第 7回	異文化接触と異文化適応の諸問題
第 8回	異文化接触とカルチュア・ショック
第 9回	文化間移動とアイデンティティ(1)文化的アイデンティティの視点から
第 10回	文化間移動とアイデンティティ(2)自我アイデンティティの視点から
第 11回	多文化環境における言語・文化習得の諸問題
第 12回	多文化環境における文化的アイデンティティ形成の課題
第 13回	異文化間・多文化間カウンセリングの視点による地域支援
第 14回	異文化理解と地域支援：異文化間心理学アプローチの応用
第 15回	総括

## 履修上の注意

1. グローバルな視野に立って異なる文化的背景をもつ人々にはどのようなこころの問題があり得るのか、臨床的関心をもって授業に臨むこと。
2. 異文化理解の視点と地域における文化の多様性、世代間の価値意識の差違などには通底する課題があることを、各自の体験と関連づけて理解すること。

## 評価方法

到達目標に照らし、授業中の質疑応答(25%)およびリアクションペーパーから把握される理解度(25%)、期末レポートの内容(50%)を勘案し、総合的に評価する。

## テキスト

テキストは特に指定しないが、授業の進行に伴い、必要と思われる文献を適宜紹介する。

**授業概要**

文献検索能力の開発、専門領域の最新知識および研究方法の習得。研究テーマの文献レビューおよび研究方法の吟味を行う。

引き続き討論を通して各自の研究テーマを深化し、中間発表に向けての研究計画の吟味、予備調査の実施、文献レビューの補強等を行い指導する。

**授業計画****到達目標**

1. 各自の研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2. 各自の研究テーマを先行研究と関連づけて、深めることができる。
3. 各自の研究テーマに即した方法論を展開できる。
4. 各自の研究テーマに即した論文作成を進めることができる。
5. 各自の研究テーマについて、簡潔明瞭にプレゼンテーションすることができる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文作成に関する総合ガイドンス	1	後期ガイドンスと後期の達成目標について
2	2年間のカリキュラムと見通しについて	2	研究実施にかかる倫理的問題の吟味
3	1年次の見通しと達成目標について	3	研究デザインの発表(1)：予備的検討
4	研究課題の発表(1)：問題点、課題の探求	4	研究デザインの発表(2)：問題点の吟味
5	研究課題の発表(2)：課題の絞り込み	5	研究デザインの吟味(1)：概念モデルの提示
6	データベースの利用法、論文検索方法を学ぶ	6	研究デザインの吟味(2)：分析モデルの検討
7	研究課題に関わる文献検索	7	研究デザインの発表と吟味(1)：倫理的検討
8	先行研究論文の輪読と討論(1)	8	研究デザインの発表と吟味(2)：調査票原案
9	先行研究論文の輪読と討論(2)	9	予備調査の実施(1)：対象・方法の確認
10	研究の進捗状況確認(1)：文献整理	10	予備調査の実施(2)：実施依頼と結果回収
11	研究の進捗状況確認(2)：テーマ確認	11	予備調査結果の吟味と討論(1)：素データ
12	関連文献の発表と討論(1)：テーマとの関連づけ	12	予備調査結果の吟味と討論(2)：分析手法
13	関連文献の発表と討論(2)：テーマの確認	13	中間発表にむけた研究デザインの吟味
14	研究テーマの絞り込み	14	中間発表にむけた研究デザインの修正
15	前期のまとめ	15	中間発表にむけた研究デザインの確認

**履修上の注意**

学術的意義とともに人びとの福祉に貢献するという問題意識を持って、主体的に研究に取り組むことが求められる。

**評価方法**

課題への主体的取り組みとその内容について評価する。

**テキスト**

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する

**授業概要**

現代社会における臨床心理学の諸問題（アイデンティティの拡散、ひきこもり、人間関係の希薄化）について学んだのちに、自分の研究テーマを主として文献的な資料をもとに探索する。文献探索の方法・レジメ作成・発表・ディスカッションの流れのなかで研究能力を身につける。さらに自分の研究テーマの発表、ディスカッションを通じて研究計画や研究方法を検討する。研究方法として行動観察法（フィールドワーク）やインタビュー面接法、アンケート調査法などを学びながら、デザイン発表や中間報告に向けて、研究計画・方法を吟味し、予備調査を実施するなどの指導をする。

**授業計画****到達目標**

1. 各自の研究テーマに関する文献検索ができる。
2. 各自の研究テーマに関する先行研究をレビューし、テーマを深めることができる。
3. 各自の研究テーマに合致した研究方法論を駆使することができる
4. 各自の研究テーマに関して論文作成を適切に進めることができる。
5. 各自の研究テーマを適切に発表できる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文に関するガイダンス	1	修士論文に関するガイダンス 後期の見通し
2	2年間のカリキュラムの見通しについて	2	研究実施に関わる倫理的問題
3	現代社会における臨床的問題（1）	3	研究デザインの発表（1）予備的検討
4	現代社会における臨床的問題（2）	4	研究デザインの発表（2）問題点の整理
5	研究課題の発表（1）問題点・課題の探求	5	研究デザインの吟味（1）
6	研究課題の発表（2）課題の絞り込み	6	研究デザインの吟味（2）
7	先行研究の文献探索とその方法	7	研究デザインの発表と検討（1）
8	研究課題に関する国内外の文献購読（1）	8	研究デザインの発表と検討（2）
9	研究課題に関する国内外の文献購読（2）	9	研究デザインの発表と検討（3）
10	研究課題に関する国内外の文献購読（3）	10	予備調査の実施（1）
11	研究の進捗状況の確認（1）文献整理	11	予備調査の実施（2）
12	研究の進捗状況の確認（2）テーマの確認	12	予備調査の実施（2）
13	研究課題の発表と討論（1）テーマとの関連付け	13	予備調査の結果をもとに研究計画の検討
14	研究課題の発表と討論（2）テーマの確認	14	中間発表に向けた研究デザインの修正
15	前期のまとめ	15	中間発表に向けた研究計画の確認

**履修上の注意**

自ら積極的に研究に取り組むこと。

**評価方法**

研究に関する意欲・態度、発表資料の作成や発表内容などを評価する

**テキスト**

文献や資料は適宜、紹介する

**授業概要**

人間の社会的行動に影響を与える諸要因を探り出し、理解を深め、研究を進めるための関係文献を紹介する。文献をもとにしつつ、議論を通して諸要因を確認しつつ、論文作成の方向性を確定する。テーマは教育、福祉、医療を含む社会的行動に関わるものとし、社会心理学的方法による研究を中心とする。中間発表に向け、研究計画を検討し、予備調査を実施することにより、課題を発見し、妥当な研究計画の作成を行っていくように指導する。

**授業計画****到達目標**

1. 研究テーマから適切な課題を導き出せる。
2. 研究テーマに適合する文献検索、収集ができる。
3. 先行研究を研究テーマのために利用し、研究テーマを深めることができる。
4. 研究テーマや予備調査の方法・結果を効果的にプレゼンテーションすることができる。

<春期>		<秋期>	
1	指導方針の説明、指導教員の研究紹介	1	秋期ガイダンスと研究計画の作成について
2	修士論文完成までのプロセスの説明	2	研究計画の検討①（研究計画ドラフト確認）
3	通年を通しての目標の設定	3	研究計画の検討②（問題点の抽出）
4	受講生の研究関心の発表①（研究関心の確認）	4	研究計画の検討③（研究計画の修正）
5	受講生の研究関心の発表②（関心領域の実現性の検討）	5	研究計画の検討④（倫理的検討と調査項目内容の検討）
6	文献検索指導	6	予備調査の計画①（調査方法と対象の確認）
7	研究テーマの検討①（課題の探索）	7	予備調査の計画②（調査項目に適合する質問項目の作成）
8	研究テーマの検討②（課題の特定）	8	予備調査実施①（調査実施、データ回収、データ入力法の確認）
9	研究テーマに関連した文献についての院生による発表と議論①	9	予備調査実施②（入力データの分析法の確認）
10	研究テーマに関連した文献についての発表と議論②	10	予備調査データの分析ならびに修士論文作成計画書の作成準備①（分析結果の確認）
11	研究テーマに関連した文献についての発表と議論③	11	予備調査データの分析ならびに修士論文作成計画書の作成準備②（分析結果から修士論文の方向性の確認）
12	文献の発表と議論を踏まえての研究テーマの絞り込み	12	予備調査の発表と議論①（本調査実施時の必要項目の検討）
13	テーマ絞り込みによる必要な文献の検討	13	予備調査の発表と議論②（本調査実施時の起こり得る問題の検討）
14	進捗の確認	14	中間発表に向けての研究計画の検討
15	春期のまとめ	15	全体的なまとめ

**履修上の注意**

最終的な目標は、修士論文の作成である。研究の社会的意義も意識しつつ、問題意識を常にもち、何を明らかにしたいのか、何を検証したいのかを明確にして、履修することを期待する。

**評価方法**

授業の積極的な参加度、発表時のレジュメ内容、発表、議論の程度ならびに日常の研究姿勢を総合的に評価する。

**テキスト**

必要な文献については、適宜紹介する。

**授業概要**

今日における心理臨床を中心とした課題を概観し、自分の興味関心を広げるとともに、問題の所在と研究テーマを明らかにする。研究テーマに則した研究計画および研究方法を立案する。そのために、国内外の先行研究の収集、先行研究のレビューを通じてこれまでの成果と今後の課題の明確化、研究上の倫理的配慮などへの理解を深める。

中間発表に向けて、先行研究のレビューの増強、研究計画と研究方法の精度の向上、必要に応じて予備的研究を実施する。全員が発表と討論に参加し、プレゼンテーション力やクリティカルな読解力や思考力を獲得できるよう指導する。

**授業計画****到達目標**

1. 研究テーマに即した文献検索が適切にできる。
2. 先行研究の成果と課題を踏まえて、研究テーマを明確化させることができる。
3. 研究テーマに沿った研究計画および研究方法を確立することができる。
4. 研究テーマに沿った論文作成能力を獲得することができる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文作成に関する総合ガイド	1	第1回 後期ガイドと後期の達成目標について
2	2年間のカリキュラムと見通しについて	2	アンケート調査の実施、被験者への依頼などにおける倫理的配慮と注意点
3	1年次の見通しと達成目標について	3	研究目的の立案①：予備的検討
4	研究テーマの立案①：教育分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	4	研究目的の立案②：問題と目的の明確化
5	研究テーマの立案②：福祉分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	5	研究方法の立案①：既存の概念モデルの提示
6	研究テーマの立案③：医療分野に関する最近の課題と心理臨床の貢献	6	研究方法の立案②：研究方法の検討
7	論文検索データベースの利用方法、論文検索方法を学ぶ	7	研究方法の立案③：仮説と分析方法の検討
8	研究テーマに関わる学術論文の検索と収集①：日本語文献を中心に	8	研究方法の立案④：倫理的検討
9	研究テーマに関わる学術論文の検索と収集②：英語文献を中心に	9	予備調査の依頼対象、依頼方法、調査内容の発表と検討
10	教育分野に関連した先行研究の発表と討論	10	予備調査の依頼対象、依頼方法、調査内容の確認
11	福祉分野に関連した先行研究の発表と討論	11	予備調査の実施
12	医療分野に関連した先行研究の発表と討論	12	予備調査の結果回収と分析
13	研究テーマの絞り込み	13	予備調査結果の検討
14	研究を行う上での倫理的配慮	14	予備調査で得られた成果のまとめ
15	前期のまとめと研究進捗状況の確認	15	第1回中間発表にむけた研究計画の吟味と修正

**履修上の注意**

学術的な意義および教育・福祉・医療の臨床現場における実践力を向上させることを念頭に置きながら主体的かつ意欲的に研究に取り組むこと。

**評価方法**

課題への主体的取り組みとその内容について評価する。

**テキスト**

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する。

**授業概要**

明らかにしたい臨床心理学的な現象を特定し、おおまかな研究テーマを決定できるように指導する。次に、関連する最新の先行研究をレビューし、研究テーマとの関係性を検討させる。さらに、議論を通して詳細な研究テーマを決定し、測定や分析の方法も含めて、研究全体の計画を立て、予備調査を実施するよう指導する。その後も、引き続き、必要な先行研究のレビューを行い、指導する。

**授業計画****到達目標**

1. 究明したい現象を臨床心理学的に位置づける能力を身につける。
2. 研究テーマに関連する先行研究を検索し、研究テーマとの異動を検討することができる。
3. 研究テーマを表現するための方法論を身につける。
4. 研究テーマを論理的に論述し、論文を作成することができる。
5. 研究テーマをプレゼンテーションすることができる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文作成の概要	1	授業のガイドラインと後期の到達目標の説明
2	修士論文完成までの見通しについて	2	研究の実施に関する倫理的配慮について
3	1年次の到達目標に関する説明	3	研究計画の発表（1）：到達点の確認
4	各自の研究テーマの発表（1）：	4	研究計画の発表（2）：問題点の検討
5	各自の研究テーマの発表（2）：テーマの絞り込み	5	研究計画の発表（3）：研究目的について
6	先行研究の検索方法を学習する。	6	研究計画の発表（4）：方法論について
7	各自のテーマに関連する先行研究の検討（1）：歴史的に重要な文献を中心に	7	研究計画の発表（5）：概念モデルの検討
8	各自のテーマに関連する先行研究の検討（2）：最新の研究を中心に	8	研究計画の発表（6）：実験計画の策定
9	先行研究と各自のテーマとの関連について（1）：相違点の検討	9	研究計画の発表（7）：分析方法の検討
10	先行研究と各自のテーマとの関連について（2）：類似点の検討	10	研究計画の発表（8）：予備データ取得の依頼と回収
11	研究の進捗状況確認（1）：研究テーマの吟味	11	予備調査の実施と結果の発表（1）：取得した予備データの検討と入力
12	研究の進捗状況確認（2）：研究テーマの修正	12	予備調査の実施と結果の発表（2）：予備分析結果の発表
13	研究の進捗状況確認（3）：研究テーマの確認	13	中間発表にむけて（1）：デザイン修正個所の確認
14	研究テーマの絞り込み	14	中間発表にむけて（2）：デザインの修正
15	前期のまとめ	15	後期のまとめ

**履修上の注意**

各自の関心のみに基づいた研究を行うのではなく、実施する研究の学術的および社会的意義がどのようなものなのかを常に意識し、研究参加者の利益が守られるよう謙虚な姿勢で研究に取り組むことが求められる。

**評価方法**

研究課題への積極的な取り組み、およびその内容について評価する。

**テキスト**

適宜紹介する

**授業概要**

中間発表において客観的評価を受け、同時に新たに明らかにされた課題についての解決を通して、より高度な研究展開と完成を目指す。

予備調査、本調査などによって収集された資料の分析の方法、視点を提示・討論しながら、策定された研究課題の達成状況を確認し、修士論文の完成を目指した指導をする。

**授業計画****到達目標**

1. 各自の研究課題に即した研究計画が策定出来る。
2. 各自の研究課題に即した計画を実施することができる。
3. 各自の実施した研究課題について適切な分析を行い、論文を作成することができる。
4. 各自の研究課題について適切にプレゼンテーションすることができる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文作成に関する総合ガイド	1	後期ガイドと後期の達成目標について
2	第1回中間発表に向けた研究デザインの確認	2	本調査結果と分析と考察の討論(1)
3	第1回中間発表の予演と討論(1)：問題の確認と修正	3	本調査結果と分析と考察の討論(2)
4	第1回中間発表の予演と討論(2)：再確認	4	第2回中間発表の予演と討論(1)
5	中間発表の評価と本調査の研究計画の発表	5	第2回中間発表の予演と討論(2)
6	本調査の研究計画の吟味(1)：目的の確認	6	修士論文のプロット作成と課題の吟味
7	本調査の研究計画の吟味(2)：方法の確認	7	修士論文のプロットの修正と吟味
8	本調査の研究計画の吟味(3)：結果分析の確認	8	論文ドラフトの作成：序論
9	本調査の研究計画の吟味(4)：倫理的検討	9	論文ドラフトの作成：目的と方法
10	研究進捗状況に関する中間総括	10	論文ドラフトの作成：結果と考察
11	本調査の実施報告(1)：データの確認	11	論文ドラフトの作成：全体の吟味
12	本調査の実施報告(2)：要約の作成	12	修士論文発表の予演(1)：プロット作成
13	本調査結果のデータ分析(1)：素データ	13	修士論文発表の予演(2)：プロットの修正
14	本調査結果のデータ分析(2)：分析モデル	14	修士論文発表と質疑応答
15	前期のまとめと研究進捗状況の確認	15	まとめと今後の課題の確認

**履修上の注意**

計画に沿って着実に研究を進めること。また、学術的意義とともに人びとの福祉に貢献するという問題意識を持って、主体的に研究に取り組む態度が求められる。

**評価方法**

論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度、進度状況に加えて、修士論文の完成度によって評価する。

**テキスト**

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する

**授業概要**

中間発表において指摘され検討を要する課題について精査して、本調査・本研究に向かって準備・検討を行う。本調査の実施を行い、得られたデータや資料をもとに、ディスカッションと分析を加えて研究報告をまとめる。修士論文の完成にむけて調査データや観察データの考察を行い、論文としての完成度をあげるよう指導する。

**授業計画****到達目標**

1. 各自の研究課題に関する研究計画を作成することができる。
2. 各自の研究課題に関する研究計画を実施することができる。
3. 各自の実施した研究課題について適切な分析を行い、論文を完成することができる。
4. 各自の研究課題について適切に発表をおこなうことができる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文に関するガイダンス	1	ガイダンス（修士論文に向けて）
2	第1回中間発表に向けて研究計画の検討	2	本調査の結果と考察（1）
3	中間発表の予行演習（プレゼンテーション）と検討（1）	3	本調査の結果と考察（2）
4	中間発表の予行演習（プレゼンテーション）と検討（2）	4	第2回中間発表に向けた予行演習（プレゼンテーション）（1）
5	中間発表の結果の検討	5	第2回中間発表に向けた予行演習（プレゼンテーション）（2）
6	本調査の研究計画の検討（1）	6	第2回中間発表に向けた予行演習（プレゼンテーション）（3）
7	本調査の研究計画の検討（2）	7	中間発表の総括
8	本調査の研究計画の検討（3）	8	修士論文の内容（目次・章構成など）の検討
9	本調査の実施と報告（1）	9	修士論文作成指導（1）はじめに（文献検討）
10	本調査の実施と報告（2）	10	修士論文指導（2）研究目的・方法
11	本調査のデータ分析と討論（1）	11	修士論文指導（3）結果
12	本調査のデータ分析と討論（2）	12	修士論文指導（4）考察
13	本調査のデータ分析と討論（3）	13	修士論文発表の予行演習（1）
14	研究の進捗状況の報告	14	修士論文発表の予行演習（2）
15	まとめ 今後の研究の進捗状況の確認	15	修士論文発表と検討

**履修上の注意**

修士論文の完成にむけて自主的に取り組み、研究の楽しさ、知る、調べる、喜びを経験する。

**評価方法**

修士論文に取り組む態度、修士論文の内容、完成度によって評価する

**テキスト**

適宜 資料を配布し、必要に応じて、参考文献を紹介する

**授業概要**

年間を通しての指導、ならびに中間発表における指導によって明確になった課題を解決し、より高度な研究へと発展をさせる。予備調査、本調査を通して、調査の企画、実施から発表までの研究の全過程を専門的に高いレベルで経験させるようとする。研究の方向性を常に確認しつつ、調査方法や分析の視点の提示や議論を行うことによって、修士論文の完成を目指とした指導を行う。

**授業計画****到達目標**

1. 研究課題に適合した研究計画が策定できる。
2. 研究課題を解決するためのデータ解析を適切に処理できる。
3. 高い論理的な構成力によって、論文を作成することができる。
4. 修士論文について説得性・納得性の高い効果的なプレゼンテーションができる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文に関する総合ガイダンス	1	修士論文作成に向けてのガイダンス
2	研究計画の発表	2	本調査分析結果と考察の検討①（先行研究と結果の検討）
3	第1回中間発表予行演習①（発表内容の確認と修正）	3	本調査分析結果と考察の検討②（考察のシナリオの検討）
4	第1回中間発表予行演習②（内容確定）	4	第2回中間発表予行演習①（発表内容の確認と修正）
5	本調査の計画①（調査対象者、調査変数の確認）	5	第2回中間発表予行演習②（内容確定）
6	本調査の計画②（分析案作成；全体的な分析の流れ）	6	第2回中間発表評価を踏まえての議論
7	本調査の計画③（分析案作成；詳細分析案）	7	修士論文構成案（目次）の作成と議論
8	本調査の計画④（計画の修正）	8	修士論文草稿の作成①（序論）
9	本調査の実施と分析案修正①（詳細分析案の修正）	9	修士論文草稿の作成②（目的と方法）
10	本調査の実施と分析案修正②（詳細分析案確定）	10	修士論文草稿の作成③（結果）
11	本調査の分析結果の討論①（結果の検討）	11	修士論文草稿の作成④（考察）
12	本調査の分析結果の討論②（追加分析案の検討）	12	修士論文発表の予行演習①（発表内容の確認と修正）
13	本調査の分析結果の討論③（追加分析の検討）	13	修士論文発表の予行演習②（内容確定）
14	本調査の分析結果の討論④（考察に向けての討論）	14	修士論文発表と質疑応答
15	進捗確認と春期まとめ	15	修士論文の全体的なまとめと展望

**履修上の注意**

研究の学術的意義を意識し、社会的な貢献も考慮しつつ、主体的に研究の完成を目指すように努力することを期待する。

**評価方法**

出席、意見等の参加性の程度、発表会における発表の仕方、修士論文の完成度によって評価する。

**テキスト**

必要な参考文献は適宜、紹介する。

**授業概要**

中間発表をおこない、他者からの評価・指摘・意見を踏まえて、研究計画および研究方法の再検討および修正をおこない、より高度な研究を目指す。

予備研究、本研究で収集した資料、データを分析し、その結果を目的・仮説と照らしながら、発表および討論を繰り返しながら考察を深めていく。自分の研究について、先行研究に対する研究成果と新たな知見、および、今後の課題を明確にし、修士論文の完成を目指して指導する。

**授業計画**

1. 中間発表を行い、質疑に対して適切に応答することができる。
2. 中間発表での意見や指摘を踏まえて、研究計画の精度を高めることができる。
3. 倫理的配慮を満たした上で、研究計画を実行することができる。
4. 得られた研究結果を適切に分析し、結果の解釈をおこない、論文としてまとめることができる。
5. 中間発表や修士論文発表において、自分の研究を適切にプレゼンテーションすることができる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文作成に関する総合ガイドンス	1	後期ガイドンスと後期の達成目標について
2	第1回中間発表に向けた研究計画の確認	2	本調査結果の分析と考察の討論①：分析結果
3	第1回中間発表のリハーサルと討論①：問題、目的、仮説の確認と修正	3	本調査結果の分析と考察の討論①：考察
4	第1回中間発表のリハーサルと討論②：分析方法、結果の予測、考察の視点の確認と修正	4	第2回中間発表のリハーサルと討論
5	第1回中間発表と質疑応答	5	第2回中間発表と質疑応答
6	本調査の研究計画の吟味①：問題と目的の確認	6	修士論文プロット作成
7	本調査の研究計画の吟味②：方法の確認	7	修士論文のプロットの修正
8	本調査の研究計画の吟味③：分析方法の確認	8	修士論文の原稿作成①：序論
9	本調査の研究計画の吟味④：倫理的配慮の検討	9	修士論文の原稿作成②：問題、目的、仮説、方法
10	研究進捗状況の中間総括	10	修士論文の原稿作成①：結果と考察
11	本調査の実施の報告①：実施状況や回収率の報告	11	修士論文の原稿作成①：全体の吟味
12	本調査の実施の報告②：データの確認と要約	12	修士論文発表のリハーサル①：プロットの作成
13	結果の分析①：素データ	13	修士論文発表のリハーサル②：プロットの修正
14	結果の分析②：分析モデル	14	修士論文発表と質疑応答
15	前期のまとめと研究進捗状況の確認	15	まとめと今後の課題の確認

**履修上の注意**

研究計画に沿って、地道に研究を進めること。研究を通じて、教育・福祉・医療における現場の発展と課題の解決に貢献するという意識を常に念頭に置きながら、主体的かつ意欲的に研究活動に取り組むこと。

**評価方法**

修士論文作成へ取り組む姿勢、意欲、態度に加えて、完成した修士論文の完成度によって評価する。

**テキスト**

研究内容、研究の進捗状況に応じて紹介する。

**授業概要**

中間発表において受けた指導により明らかになった課題の修正を行い、研究を発展させ、修士論文の到達点を決定し、データの収集を行う。次に、収集したデータの分析方法や、検討する現象の理論的な位置づけ等に関する最終的な確認を行い、修士論文を作成するよう指導する。

**授業計画****到達目標**

1. 研究課題を明確にし、課題に到達するための計画を立てることができる。
2. 研究課題を達成するための方法を検討し、実施することができる。
3. 研究課題に即した分析を実施し、修士論文を作成することができる。
4. 作成した修士論文に基づいて、明瞭簡潔にプレゼンテーションすることができる。

<春期>		<秋期>	
1	修士論文作成に向けた総合ガイダンス	1	後期の達成目標に関するガイダンス
2	各自の研究計画の発表	2	各自の経過報告
3	第1回中間発表の発表練習（1）：研究目的と方法の確認	3	第2回中間発表の発表練習：グループ（1）
4	第1回中間発表の発表練習（2）：分析方法と結果の確認	4	第2回中間発表の発表練習：グループ（2）
5	中間発表の評価の吟味	5	中間発表の評価と分析方法や研究意義の調整
6	研究の方向性に関する最終的な確認	6	修士論文の現実的な到達点の吟味（1）：分析手法の確認
7	本調査の実施計画の発表と討議（1）：研究目的の吟味	7	修士論文の現実的な到達点の吟味（2）：分析結果の確認
8	本調査の実施計画の発表と討議（2）：研究方法の吟味	8	修士論文草稿の作成（1）：要約の作成
9	本調査の実施計画の発表と討議（3）：分析手法の吟味	9	修士論文草稿の作成（2）：問題と目的
10	本調査の実施計画の発表と討議（4）：結果の予測	10	修士論文草稿の作成（3）：方法と結果
11	本調査の実施（1）：倫理的配慮の確認	11	修士論文草稿の作成（4）：結果と考察
12	本調査の実施（2）：ローデータ取得と入力	12	修士論文発表の予行演習（1）：プレゼンテーション方法の確認
13	本調査の実施（3）：分析結果の報告	13	修士論文発表の予行演習（2）：全体の確認
14	研究進捗状況に関する総合的な評価	14	修士論文発表と質疑応答
15	前期のまとめ	15	修士論文のまとめ

**履修上の注意**

特別課題研究Ⅰで習得した修士論文作成のための方法論を駆使して、データ収集や分析等の実務的な学習が中心となる。課題作成に向けて、これまで以上に自発的な態度が求められる。

**評価方法**

研究課題への積極的な取り組み、およびその内容について評価する。

**テキスト**

適宜紹介する。